

社団法人私立大学情報教育協会
平成20年度第3回英語学教育FD/IT活用研究委員会議事概要

- I. 日 時： 平成20年8月18日（月）午前11時～午後1時
- II. 場 所： 私立大学情報教育協会事務局会議室
- III. 出席者： 山本委員長、田中副委員長、北出委員、西納委員、小野委員、小林委員
井端事務局長、森下、恩田

IV. 検討事項

1. 英語学士力の定義と範囲について
2. 英語学士力に必要な知識について
3. 英語学士力に必要な技能について
4. 英語学士力に必要な知的能力について
5. その他

資料： 1. 委員会次第、出席表、
2. 英語学士力についてのまとめ（山本委員長作成）
3. 参考：「学生 基礎力ない」（日本経済新聞抜粋：平成20年7月23日付）
4. 参考：「英語教育の授業」（ファカルティデベロップメントとIT活用）
{私立大学情報教育協議会編：平成18年度版}

議事概要

1. 「英語学教育における学士力について」
委員長より英語学士力についてのまとめ（たたき台）の提案説明がなされ、その資料に基づき以下の点に関して議論が行われた。

主なポイントは次の通りである。

総論：英語学士力の定義と範囲

各論1. 英語学士に必要な3つの知識（knowledge）

2. 英語学士に必要な4つの技能（skills）

3. 英語学士に必要な5つの知的能力（intellectual skills / competence）

議 論

総論：英語学士力の定義と範囲

- ①英語学士力は、大学学士課程教育の成果として客観的に説明・測定・実行できるものである。
- ②英語学士力は、現実の学習成果ではなく社会的要請に基づく知識・技能・能力である。
- ③英語学士力は、学生が自ら自覚し、またその学習成果として実行可能である。
- ④英語学士力は、広く長い（life long, life wide）継続的な知識・技能・能力の一過程である。

総論に関してはこれまで議論されてきた卒業生の質保証（graduate assessment）、社会の期待と大学の説明責任（accountability）、自律的学習者の養成、生涯学習（lifelong and life-wide education）などの観点をふまえて作成されたものであり、異議なく了承された。

各論に関しては多方面にわたる議論がなされた。

1. 英語学士に必要な3つの知識 (knowledge)

①語彙の知識 卒業時 8,000 単語 (新聞、学術用語、映画、会話が98%理解できる)

②文構造の知識 卒業時 TOEIC 500 点 (文構造の98%が理解できる)

③異文化の知識 異文化を理解して英語圏の人たちと一緒に仕事ができる

・「語彙の知識」に関しては具体的に語彙数を明示することはインパクトがあり大切なことであるが、TOEIC500点とのバランスを検討する必要がある、数値的にはもう少し低い3,500~5,000語程度ではないかという意見があった。

・語彙数を明示する場合には、受動的語彙(receptive vocabulary)なのか能動的語彙(productive vocabulary)であるのか等も含め、今後とも議論を重ねていく必要があるとの認識で一致した。

委員長からは中高での学習で2,700語程度であるので8,000語という数値目標を示したという説明がなされ、語彙数に関しては今後精査していくこととなった。

・「文構造の知識」として卒業時 TOEIC 500 点という数値に関してはほぼ了解が得られたが、文構造の理解度という面で、この件に関しても今後とも検討していくこととなった。また TOEIC 点数の正当性についても議論が必要であり、TOEIC 500 点に社会 (企業) がどのようなものを期待しているのかを吟味すべきであるとの意見もあった。

・「異文化の知識」に関しては概ね了承された。

2. 英語学士に必要な4つの技能 (skills)

①聴く技能：英語のラジオやテレビ、英語の映画やドラマを聴いて、そのあらすじと放送の目的・内容
・概要を理解する能力。また、専門分野の口頭発表や授業などを理解する能力。

②読む技能：英字新聞や時事記事のあらすじと目的・内容・概要を理解する能力。また、専門書などを熟読して要約する能力

③話す技能：日常生活での対話による会話能力。ディスカッションやディベートなど、英語で交渉する能力。多人数の前で考えや思想をうまく伝達、質問に的確に答えられる能力。

④書く技能：文通による英語表現力とコミュニケーション能力。相手に対して英文で交渉する能力。自分の考えや思想を伝達して伝えられる英文作成能力。

これらの項目に関してはすでに「英語教育の授業」(ファカルティ開発とIT活用)の作成を通じて合意を得られているものであるが、英字新聞などについても具体的にどのようなレベルのものをイメージするかなど、もう少し具体的に説明する必要があるのではないかという意見が出された。「2. 英語学士に必要な4つの技能」に関しては、「3. 英語学士に必要な5つの知的能力」と大いに関連があり、2の項目に3の項目を可能な限り含めるという方向で検討していくこととなった。

3. 英語学士に必要な5つの知的能力 (intellectual skills / competence)

- ①コミュニケーション能力：英語の文字や音声を使って他者と関係を作り、意味を生み出す能力。
- ②批判的思考能力：英語言語技術を使って問題を批判的に考え、思考を進めて決定する能力。
- ③共同作業能力：英語圏の他者とチームを構成し、物事の進め方や協働を通じて結論を導く能力。
- ④責任分担能力：英語圏との社会活動に参画して自らの能力を発揮し責任を分担する能力。
- ⑤自己管理能力：自己を管理し自己英語能力を継続的に向上させる能力。

今回の会議ではこの「英語学士に必要な5つの知的能力」の取り扱いに議論が集中した。

3の項目を1と2とは別に明示することに関して、慎重論と積極論が出されたので、両者の意見を議事録では個別に記す。なお、議事録で1となっているのは「1. 英語学士に必要な3つの知識 (knowledge)」、2となっているのは「2. 英語学士に必要な4つの技能 (skills)」、3となっているのは「3. 英語学士に必要な5つの知的能力 (intellectual skills / competence)」を指している。

慎重論

- ・この項目が英語学士力固有のものといえるのか疑問であり、英語学士力で扱うよりも他の学士力と合わせて、共通分野の提言として盛り込んではいかがか。また3の項目を盛り込むとしても「総合的能力」や「総合的実践能力」というようなコンパクトな表現で扱うべきである。
- ・1と2は英語学士力を明示する際には必要不可欠であるが、3に関しては1と2との相関関係が見えにくい。また、学生が1の知識と2のスキルを身につけても、3の能力を発揮できるか疑問であり、3つの項目の関連性が低いのではないだろうか。したがって、3の項目は2の中に含めて記すほうが理解され易いのではないだろうか。
- ・3は国語力に基盤をおいているので、英語学士力と切り離した方がよいのではないか。
- ・3で述べられている自己管理能力（自律学習能力）を実際の大学教育で身につけさせることが可能であるか疑問である。明示するとなれば「自己管理能力」を育成して活用する場も必要であり、そのような科目をカリキュラムの中に設置する必要もある。したがって、3に関しては絵に描いた餅になる危険性が高く、3のエッセンスだけを纏めてみてはいかがか。
- ・コミュニケーション能力を「対人関係能力」や「社会的責任能力」などの言葉に置き換えて、総合実践能力として示すことにより、「コミュニケーション能力」という言葉に具体的なイメージを与えることが可能ではないか。

積極論

- ・3がこれまでの大学の英語教育でもっとも欠けていた視点であるのでぜひとも明示すべきであるが、一般的な能力でもあるので明示方法が難しい。何らかの工夫が必要でないだろうか。
- ・今回の学士課程教育の議論で求められているのは社会的能力（社会で身につける能力）をいかに大学教育において身につけさせることができるかという点であり、3を英語学士力に加えなければアウトプットの評価が不可能となる。
- ・企業が求めているのは使える英語（実践的な英語運用能力）であり、それが3にまとめられているので、大学が社会的責任を果たす上でも3の項目を何らかの形で明示することが必要である。
- ・英語学士力を母語を含めた言語学士力として捉えると、3を明示する必要性が高い。
- ・3がすべての学士力の前提として他の分野でも謳われていけばよいが、他分野で示されないとすれば、英語学士力の中で明示すべきである。
- ・これまで英語教育が大学の専門教育と比べて軽んじられてきた側面がある。それは英語教育をツール教育だと捉えてきたことに一因があり、その意味で3を明示する意味は大きい。
- ・2の各項目の説明部分を簡易にして、3で重要な部分を纏める形で明示してはいかかがか。
- ・ヨーロッパの高等教育ほど実学教育を重視していない日本の大学教育では、外国語習得レベルを示すCEFRの基準に加えて実際の運用能力を明示した3の要素を学士力に加える必要がある。

上記の議論をふまえて、今後の検討課題が示された。

- ・前回私情協で纏めた資料（「ファカルティデベロップメントとIT活用」）を基に社会と連結したプロジェクト教育が必要であり、それを前提に最後のまとめをしていくことが大切である。その際には目標値と測定方法を連結させて明示することが必要である。
- ・具体的な授業設計を社会で活用する力（3の項目）まで含めてレイアウトすることにより、提言に適切に盛り込むことができるのではないかと。すなわち、3をナレッジと技能を基礎とした能力と位置づけて2の中うまく纏めることができるのではないかと。
- ・今後は2段構えで進めてみてはいかかがか。すなわち、当面はコアカリキュラムをベースにして、総合的に活用する能力をコンパクトな表現（キャッチコピーのような形式）で示す。同時に、数値目標も含めて各項目をブレイクダウンさせた細目を作成して、本委員会の意図を現場の教員に示して理解を得る。まずは前者の作業を2の項目の中に3の項目を含める形ではじめ、8月末までに素案（たたき台）を作成して9月中旬までに纏め、文部科学省に提案する準備をする。
- ・私学の意思を反映させた「英語学士力」にすることが大切である。その際には測定装置と授業計画を

明示して大学が社会的責任を果たすプロジェクトにすることが重要である。今後は関係図などを挿入するなどして理解を得やすい方法で提示することが効果的であろう。

今後のスケジュール

・委員長が上記の議論の内容をまとめた文案を8月末までに作成する。その後、各委員にネットで配信して意見交換を行い、9月中旬を目処に取り纏めを行う。可能であればJACET（9月11日～13日早稲田大学早稲田キャンパス）の機会を利用して意見交換を行うこととなった。